



【本文監修:南九州歴史学会 画:KENRO】

明治維新150周年企画
かごしま
ISHIN物語

明治維新がもたらしたさまざまな変化を
分野ごとにご紹介します。

第3話 農林水産業の発展

島津家第28代当主・島津斉彬の時代、豊かな自然に恵まれた
鹿児島では、農林水産業の振興が進められていました。
今回は、自然を生かして発展を目指した人々のお話です。

林業が支えた薩摩の発展

江戸時代、富国強兵を目指す薩摩藩は、豊かな自然を生かして農林水産業の振興に力を入れていました。藩主島津斉彬は「農は国の本なり」と唱え、アメリカの農機具の研究なども行わせています。海外から伝わったサツマイモやブタは薩摩ブランドとして藩外に発信し、江戸や大坂でも有名になります。斉彬は釣り好きということもあつてか、漁場図の作成など漁業振興政策も打ち出しています。

また、クスノキから採れる樟脳しょうのうは、藩の貴重な収入源のひとつで、長崎貿易で海外に輸出される樟脳のほとんどが薩摩藩のものであつたといわれています。防虫剤や強心剤として使われていた樟脳ですが、江戸時代半ばまではクスノキの苗木を人工的に育てられませんでした。そこで、藩の木材や山林を管理する奉行を務めていた山本

西郷隆盛は、明治政府で務めていた頃に、農業に関する建言を記しています。その中には、農政は国の基本であるため勸農寮という農業推進の行政部門を置くことや、欧米の農業技術を採り入れるために外国人を招いて農学校を建設することなどを提案しています。しかし、朝鮮半島をめぐる問題で政府から離れたことから、鹿児島を舞台に農業を推進させていくことになりました。

故郷に戻った西郷は、炭窯が築かれた寺山の地を訪れ、教え子たちとともに一帯の開拓に着手します。昼は開墾に努め、夜は勉学に勤しむ若者。およそ150名がこの地で米やサツマイモなどを育てました。西郷も自ら鋤くわを持ち、薩摩の人々の暮らしが豊かになるよう汗を流します。付近に宿舎を設けて、泊まることもあつたそうです。開拓のため、大鉋おわたや斧を注文した記録などが残っており、山林地から

寺山での農地開拓へ



豚骨

薩摩藩は琉球王国を通じて中国の食文化が入っていました。その代表が豚肉食です。江戸の薩摩藩邸で多数豚が飼育されており、豚肉は薩摩の特産となっていました。徳川慶喜も小松帯刀に再三、豚肉を所望していたという記録が残っています。

黒豚好きの西郷も
愛した豚骨

維新
紀行
郷土料理

登場人物



愛すべき偉人
西郷 隆盛
Takamori Saigo

西郷隆盛は貧しい武士の家に生まれましたが、島津斉彬に見いだされて国事に奔走。幾多の難局を乗り越え、明治政府樹立の立役者となりました。明治維新後の新政府で重要な役割を果たした後、鹿児島に戻り私学校を開設し、若者の教育にもあたります。今なお多くの人々に愛されている偉人です。

史跡紹介



山本藤助が築いた
寺山炭窯跡

世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産。発掘調査の結果、当地に生えていたスタジイ(シイノキの一種)などを用いて炭を作っていたことが明らかになっています。

次回は 薩摩の教育と医学